# GSEF ビルバオ大会・ワークショップでの発表に参加して

社会福祉法人「共生シンフォニー」
中崎

2019 年 10 月 1 日～3 日にスペインのビルバオ市で行われた「Global Social Economy Forum」に参加し、ワークショップでの発表を行った。
それについての個人的な感想と発表の内容を報告する。

まず、ワークショップであるが、1 日と 2 日で 9 つのワークショッププログラムに分けられ、合計 45 種類のワークショップが行われた。
私のその中で 2 日目のワークショップ 4－1「社会と労働の包摂」で発表を行った。発表者は、スウェーデン、ビルバオ、ウルグアイと私の 4 人。プレゼンテーションの持ち時間は、一人 8 分、言語は、スペイン語 or 英語 or フランス語のみ。
そして、今回のビルバオ大会でも、日本からの発表者は私のみ。本当は、発表する気はさらさら無く、すすめられて仕方なく気のない申請を書いたのに、事務局の方々の英訳が素晴らしく、採用されてしまった。
もちろん、私は英語もスペイン語も全くわからない。予定にない採用と海外というプレッシャーで吐き気を催しながらのプレゼンテーションを行った。

社会福祉法人共生シンフォニーは、滋賀県大津市で福祉事業を運営している。現在は、6 つの障害福祉サービス事業所と 1 つの高齢者デイサービスセンター（地域密着型）、合計 7 事業所を運営している。設立は、1986 年。障害がある当事者達とそれを支援する人達数人で立ち上げ、2003 年に社会福祉法人を取得した。
創設時は、7 人だったのが現在では、240 人。その内、雇用者数（労働法規内で給与として出している人）は、約 140 人になる。
ここで、誤解が無いように説明したいのは、共生シンフォニーは、社会福祉法人ではあるが、協同組合のような社会福祉法人であると言うことである。創設の仕方からもわかるように、誰かの慈善事業で創設したのではなく、障害を持った人も持たない人も共に共働する、「自分たちが働く場所」を創ったのである。
理事や理事長は、数年毎に交代を行い、運営の主体は働いているメンバー。もちろん、理事の中にも運営の主体にも障害者も入る。理事会は、働いている者達の応援団であり、むしろ責任とアドバイスと見守りを行っているのである。社会福祉法人は便宜上取っただけで、法人格取得当時に協同組合法が制定されていれば、きっと協同組合を選択したであろう。
シンフォニーの障害者の雇用は 75 人。これは、大半が、職業的重度障害者であるため、障害福祉サービスの就労継続支援事業 A 型を利用しているが、それ以外にも法人でスタッフとして一般雇用している障害者も含まれる。A型を利用する方が、給付金の対象になる障害者や難病者がいるが、何人かはわざとしていない。シンフォニーの中では、このような福祉サービスの保護雇用（？）制度を利用していない障害者以外の就労困難者も沢山いる。例えば、シングルマザーや引きこもり（だった人）、ホームレス（だった

人）、高齢者、難病者、刑余者等など。機能的な障害を持たない人達は、環境的な問題で社会に就労困難者にされてしまった人として、福祉事業の中でスタッフ（職員）として雇用。ダルク（薬物依存者の自助グループ）のプラグラム修了者の人たちもいた。これらの人々は、何の制度も補助も使わずに、長年雇用を続けてきた。このような障害者だけではない就労困難者も共に働く活動は、ソーシャルファームとして紹介されることもある。

引きこもりやホームレスの人達は、当法人で就労することにより、引きこもりでなくなり、ホームレスでなくなっていくので、「だった人」という過去の話になる。もちろん、そこから脱却には、本人や周囲の努力がいる。環境の改善だけではなく、本人もモチベーションやシンフォニー以外の人達との協力が欠かせない。法人外の人達の協力を求め、ネットワークを作り、沢山の支える手を作ることによって、体制を作っていくのである。

そして、その中で何人もの人達が卒業していった。特にホームレスやダルク、引きこもりの人達は、自信を付け、新しい家庭を持ち旅立っていく。

特にそのような人達の働く場所を担っているのが、事業所のひとつ「がんばカンパニー」である。がんばカンパニーでは、現在は障害福祉サービスＡ型の利用者として障害者雇用 44 人とスタッフとしての雇用 16 人の雇用を担っている。　もちろんスタッフには、就労困難者が多数在籍しており、また卒業もしていった。

がんばカンパニーの強みは、「市場の競争力」である。主な事業は、クッキー等焼き菓子の製造販売であるが、売上は常に 1 億円をくだらない。2 億円を超えた年もある。もちろん競争相手は、一般の製菓会社。企業との競争により、ネットショップやコンビニ、百貨店などへの卸が売上の大半を占める。それ以外でも、「がんばクッキー」という長年の安定した自然志向のブランドも持っている。

この売上によって、たくさんの障害者の給与が支払われ、また就労困難者スタッフを雇えることとなる。がんばでは、女性スタッフが多い。産休や育休を取る人も多く、シングルマザーもいる。家族に、難病者がいたり、障害があったり、不登校の子どもがいる人も多い。それは限定された期間であるため、つらい時期を支え合い、そして、支えられる人から支える人に変わっていくのである。

介護スタッフとして、就労困難者を雇っているのが「まちかどプロジェクト」である。引きこもりやダルク出身の人達が、重度の身体障害の人達の介護をしながら、障害者と一緒に悩みや人生の辛さや不条理を乗り越えていく。

その方法は、自分を表現できる演劇活動を通じてされる事が多い。一般的に、障害者の芸術は、絵や造型作品にされることが多いが、まちかどプロジェクトの障害者メンバーは、自分たちの人生を演劇という形で表現し、自らが表現者となって、社会に問題を投げかけ、改善しようと試みている。演劇の内容は、障害者や就労困難者が、自分の体験を元に自分たちで台本を創る。この劇団は「まちプロ一座」として、地域の自治会や学校、企業から、たくさんの公演依頼が入っている。

今回、大津市長の出演のきっかけとなった、大津市との協同の制度を運営している「くれおカレッジ」。ここでは、特別支援学校や一般高校を卒業した、知的障害（又は発達障害）を持つ、一般大学には入れなかった人達が通う、4 年間の施設である。
もちろん、知的障害者向けなので、カリキュラムの中心は、社会生活と企業就労のための職業生活をスム

ーズに行う事が中心である。
　この制度が出来たきっかけは、大津市長が、がんばカンパニーに視察に来たときに、「知的障害があっても高等部卒業後にも勉強する権利がある。健常者がほとんど大学に進学している近年、障害者だけが、18 才ですぐに就職はおかしい。知的障害があるからこそ、もっとゆっくり勉強させてあげたい、時間がいる。モラトリアム時間を欲しい。」と市長に強く訴えた。
　日本の知的障害の人達の流れは、東京を中心に特別支援学校卒業後、すぐに就職、高等部では企業実習や作業実習に時間を取られ、学習に費やす時間が少ないと言う流れに逆行したものである。しかし、市長は強く共感をしてくれて、すぐに市単独の制度「おおつならではの就労支援」を作るという行動を起こしてくれたのである。（残念ながら、全て市単独ではなく、障害福祉サービスを利用した上での加算制度となったが、様々な市単独制度が廃止になっていく中では、存続を続ける大津市が力を入れた制度となっている。）
　そして、入学式も卒業式も市長自らが出席し、祝辞を述べるという、普通の施設（事業所）では見られないこともしてくれた。

　今回の市長出演もくれおカレッジの卒業式の後の対談で依頼した。本当は、GSEF への参加することを誘い、市長はかなり興味を示してくれたが、10 月 1 日からの市議会は決定しており、市長が不在には出来ないためビデオ出演となった。挨拶も留学経験がある、市長自ら作成し出演、英語で挨拶を行ったのである。

　共生シンフォニーの取組は、ひとつの法人だけでは成り立たないし、完結しない。様々な、同じような社会福祉法人や福祉事業者、行政、社協、地域と連携し、成立する。
　それは、障害者や就労困難者のひとり分の支援だけでも、何団体ものネットワークが形成される。これは、滋賀県の特色かも知れないが、様々な支援者が多く関わることにより、結果的に困難な人々の長い人生が、救われることになる。例えば、シンフォニーを辞めたり、次のステップで卒業した場合でもシンフォニー以外の関係が続く。支援する側も、いきなり「困りました」と相談に来られるより、その人のことがわかっていて支援しやすいし、生活困窮への転落の防止にも役立つ。
　また、たくさんの人が関わり、たくさんの目があると言うことは、本人の権利を守ることにも役立つ。一法人が出来ることには限りが有る。見方も偏るし、相性もある。そのようなことを避けるためにも積極的に協力を求められる体制を作る。
　今回のプレゼンテーションの中には、社会福祉法人グローの「アールブリュット」という障害者芸術の仕組みも極力してもらった。

　法人の取組にも傾向があるように、私たちは、自分たちが様々な困難者で、活動は生活や人生そのものである。全員が生活をかけ、全員がよりよい人生を求めた活動を行っている。だから、強い。生活がかかっているのだから強い。また、当事者であるから強い。私たちの訴えは、当事者そのものであり、心の叫びである。虐げられたり、お金に困ったり、差別されたり、孤独に耐えたり・・。様々な辛さを一緒に支え合うことによって強さに変えてきた。もちろんそうでない環境のスタッフもいるが、共感し、一緒に活動し、一緒に怒り、一緒に悲しむ仲間である。
　だから、プレゼンテーションの内容も、こんな思いをしなくても良い社会になって欲しいという気持ち

が入った。
　そのおかげか、ワークショップの中で一番拍手が多かった（参加した事務局談）ということであった。
　また、前回のカナダのモントリオールで行われたGSEF2016にも参加し、2017年のソウルの「Social Enterprise Leaders Asia」に事例報告で出演した失敗を生かして、英語がわかりやすいように、映像を中心し、アメリカ人スタッフ（シンフォニーで働いている）にネイティブな英語でナレーションしてもらい、さらに英語の字幕まで入れた。表現や説明も海外で使用されているものを研究して、事務局のアドバイスで長々した説明的なのも省いた。
プレゼンの手法はどうであれ、思いは世界でも同じで、伝わると感じた。
特に制度だけではなく、実態の当事者が自ら実践し、結果を出し、評価され、制度の形が出来上がる。その間には、様々な人達や団体の協力がある。それを育める地域がある。
　それでこそ共生。英語には出来ない、共に生きることの共生である。皆の力で出来上がったものが、共生シンフォニーなのである。